

神戸ワインと農業公園

(財)神戸市園芸振興基金協会
高橋 義之

神戸は、瀬戸内海東部に位置し、緑の六甲山を背に広がる美しい国際港湾都市です。このみなと街の西に、神戸ワインの里である神戸市立農業公園（以下農業公園とする）があります。

農業公園ワイン城は、昭和46年の東播用水事業を皮切りに、昭和51～58年国営農地開発事業で約200haの国有林・財産区有林にぶどう園・ナシ園の造成・植栽を行い、昭和59年に開園し、神戸ワインの誕生に至りました。

神戸ワインは、宮崎前市長の ①太陽の恵み、豊かな風土が伝える香り高い神戸ワイン、②本格的なワインが広げる神戸の食文化とふれあいの輪、③一房のぶどうに託す明日の農業と言った“農業の振興”を基本テーマに育み続け、新しい神戸のブランドとしてデビューしました。いまでは毎年約80万本のワインが作られ、入園者や京阪神の皆様に親しまれています。「神戸ビーフによくあうワインを」と日々品質の向上に努め、1988年以来5年間にわたって毎年モンデセレクションを受賞しております。

農業公園は、(1)東播用水関連農用地開発事業の推進、(2)市域農業の拠点づくりと農工商知複合経営の導入による付加価値および就業機会の増大、(3)市民の安らぎの場の形成、(4)神戸ワインと神戸ビーフの組み合わせによる地場産業の育成、(5)観光資源の開発などを目的に設立されました。全国から毎年約60万人の入園者数を迎え、朝市や各種のイベント、ワイン・ビーフを楽しんでいただいています。平成3年には「研究と普及の機能をもつ諸施設と市民の憩いの場を兼ね備えた農業公園を拠点に、都市農業を活性化させる一つの方向を示した」を理由に1990年度朝日農業賞を受賞しました。農業公園のような施設はとかく観光面を重視しがちですが、専業農家の育成を重点に置いた施設でもあります。定期的に生産者を対象にした栽培研究会の開催や、6年前からフランスやドイツ、山梨、長野などのぶどう先進地域の視察などでよりいっそうのレベルアップに努めています。

気候（農業公園周辺では）は、4～10月の日照時間が1480時間と長く、降雨量は780mmと比較的少なく、平均気温は20.3℃と好適な条件に恵まれています。また、春には北北西の風が吹くので地面の湿気過剰の害は少ないです。土壌条件は、一般的に小石まじりの礫質の瘦地で水捌けが良いのでぶどう栽培に適した気候・風土と言えます。神戸ワインは、約120haの栽培面積でセーベル9110, セーベル13053, カベルネ・ソービニオン, シャルドンネをはじめとする欧州系ワイン専用品種を用い、有機農法で栽培した“100%神戸産ぶどう”を

原料としています。栽培は、作業性や神戸の気候風土を考えた垣根式栽培で、人手を省力化しています。有機質の肥料は、市内で飼育されている約11000頭の牛糞を堆肥化し、それを施用しています。農業公園と5つの農事組合法人（約37戸の生産者からなる）を中心に昨年の収穫は800tを越えました。現在、農業振興と収穫量の増加をめざし、新に5つの農事組合法人が栽培に取り組んでいます。神戸ワインは、生産者から買い上げたぶどうを、財団法人神戸市園芸振興基金協会が醸造し、販売を株式会社神戸ワインが行う分業制で行っています。将来、200万本(720ml換算)の製造を見込んでおりますが、この他にも甘味果実酒”神戸カシスワイン”や”神戸ウォーター”の製造にも意欲的に取り組んでいます。

平成5年4月には「古き良き街の魅力の創造と新しい街の息吹の出会い」をテーマに”アーバンリゾートフェア神戸’93”が開催され、メイン会場の一つとして北区にフルーツ・フラワーパークが開園します。「都市と農村の共存共栄」「人と花と果実の触れ合いの場」をテーマに、六甲北地区の都市化並びに道路網の整備に対応して、市域農業の振興と地域の活性化、21世紀に対応した活力ある農業の展開の場として、また市民に緑豊かな文化の薫り高い憩いの場を提供する事を目的としております。フルーツ・フラワーパークは、約100haの敷地内でモモ・リンゴ・ナシ・生食用ぶどう・加工用ぶどうをはじめとする果樹の栽培、神戸チーズの製造、生長点培養による花卉、野菜の生産・研究などが行われる予定です。

これからも、神戸の気候風土に適した栽培技術や醸造技術の改善を進め、「太陽の恵みと豊かな風土の味わい」をワインに表現できるよう努力していきます。このことが近年、国産ワインを取り巻く厳しい状況打破の一端になるのではないかと思います。

